

[制作記録]

テキスタイルの装身具

中 島 俊市郎

ある物が工芸的であるとされる場合、制作技法や素材をはじめ、その形状や用途、制作背景など多様な視点からそれが工芸的である理由が挙げられるが、工芸の概念や工芸の領域を捉えることは難しい。工芸とは何を示す言葉なのだろうか。それについての考察の一環として作品制作に取り組んでいる。今回は、その発表の機会として平成16年10月18日から23日に渡り、ワコール銀座アートスペース(東京)において、「テキスタイルの装身具」と題した作品展を開催した。

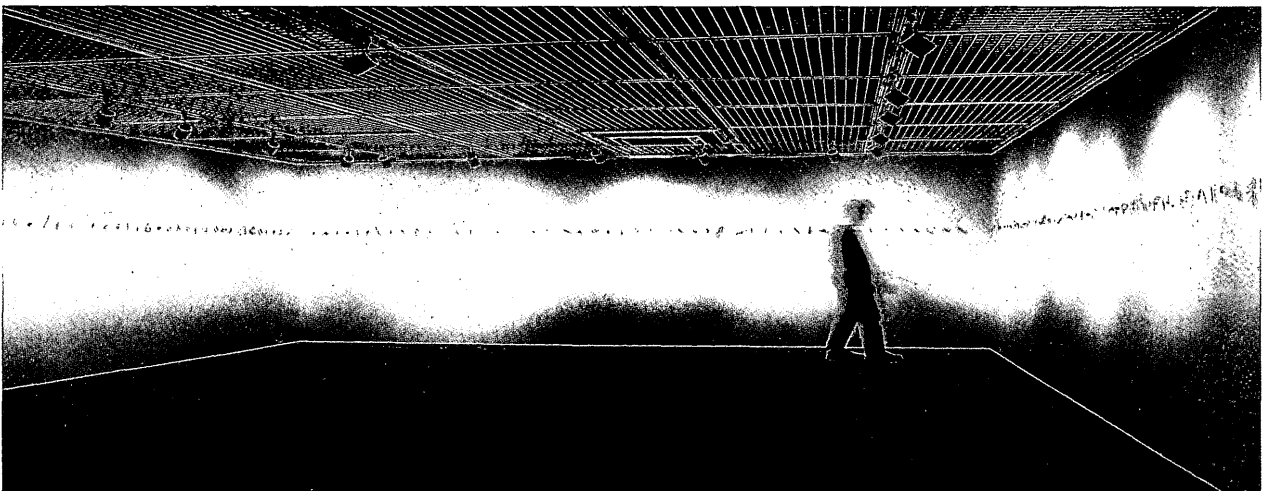
この展覧会では、絹や羊毛、麻や綿などの繊維素材で制作された約5cm立方の立体作品250点ほどを出品した。この立体作品は、それぞれがバンダナやネックレス、ブローチといった装身具として使用することができ、道具としての用途と機能をもつ。これまでの制作では自身の制作物から用途を切り離し装飾性を特化させる試みを続けていたが、今回の制作では道具としての機能と装飾の良好な関係を探るために、それまで自作に与えることのなかった機能と

いう要素を意図的に取り込むこととした。

今回の制作を通じ、装身具がそれを身につける人に与える充足感に私は関心を覚えた。装身具が充足感を人にもたらすことは道具としての機能の一つと捉える事が出来る。この充足感はその装身具のもつ様々な価値からもたらされる。装身具のもつ財産的な価値や社会的な価値が身につける人に充足感を与える場合があり、また野山で草花を摘み、胸や髪につける楽しみがあるように、前述のような価値を持たないものであっても、美しいとか愛らしいと感じるものを身につけることで充足感を得る事もあるだろう。この場合は、美しさや愛らしさそれ自体が装身具の価値となり道具の機能となる。制作という実体験を通じ、装身具の存在は人が美を求める自然な姿を示すものでもあることを、あらためて認識することとなった。

(なかしま・しゅんいちろう) 工芸・染織)

展示風景





『Stalk series 3 - 362』絹、羽毛、レーヨン等／2004